

視点

子どもたちの未来は…



福島県医師会常任理事

市川陽子

はじめに

大学を卒業し40年以上、開業してからもうすぐ30年、産婦人科の夫とともに、小児科医として沢山の子どもたちやその保護者の方々と関わってきました。昭和・平成・令和と時代の移り変わりとともに、妊娠・出産も子育てのスタイルも意識も変わってきました。昔の方が良かったなど言うつもりはありません。しかしながら、命を育み育てていくことに流行などはないのだ、いや、あってはいけないとも思っています。

今回の視点には、結論はありません。

高齢者に突入した小児科医として日頃思うことを述べたいと思います。

字数の都合で、これでも思うことのほんの一部ですが…。

それでいいのか？離乳食

乳幼児健診では、生後5ヶ月頃から離乳食の開始をお勧めしています。

この離乳食、かつては実家の親世代に聞い

たり、先輩親に聞いたり、健診で聞いたり、離乳食の本を購入したりして、ひと手間かけつつも面倒ではないやり方を日々の暮らしの営みの中で自然に身につけることがほとんどでした。

おもゆからお粥、そして軟飯、おかずも自分たちが食べるものを味付け前に薄味にしてすり潰し、お粥に混ぜるなどして与える。味噌汁は具の沈んだ上澄みを更に少し薄めて与える、りんごはすりおろして果汁を搾り、みかんも同様に絞って、バナナは潰してドロドロにして、野菜もくたくたに煮てドロドロに潰して、タンパク質も豆腐のほかに、鶏ササミや白身魚を茹でてすりつぶして与える、多少の味付けは出汁などでつけてオッケーでした。（私自身はもっと適当でしたが子どもたちは腹を壊すことなく育ちました。）

昨今は核家族化が進み、共働き世帯も増えました。それに伴い、初めて子育てを経験する若い親御さんにとっては、これどうするの？と聞ける相手が身近にいない、いても身

内は面倒臭かったりする、聞かれた祖父母世代も、今は時代が違うからと口を出すのを遠慮する、…このような状況のご家族が増えているように感じています。

そして拍車をかけているのがネット検索です。離乳食レシピでもなんでもスマホで検索できてしまう便利な世の中になりました。その結果、離乳食についての外来での会話はこんなやり取りが当たり前になりました。

母親：うちの子8ヶ月になるのにあまり体重が増えなくて心配です。

私：どんなものをあげているの？

母親：7倍粥80gと豆腐30gと野菜いろいろ30gです

私：お肉やお魚や卵は？

母親：なんかアレルギーが怖くて…

私：お味噌汁は？

母親：えっ？！一歳前なのにお味噌汁飲ませていいんですか？！

どのぐらい食べさせているの？という問いに、どのお母さんもgでお答えなさいます。20年以上前なら「子ども茶碗に半分とか8分め」とか、人参・ジャガイモなら「ひとかけ」などの表現でした。レシピ通りに正確に離乳食を作るお母さんたち、エライなあと思いつながら、離乳初期ならともかく、中期以降はもう大体の目分量でいいんじゃない？でないと毎日作るのしんどくなりませんか？と声をかけるのですが、これも情報過多の産物なのだろうなと感じています。

アレルギー学会ではとうに否定されている、タンパク質を遅めに与えると良いという学説がなぜかまだ都市伝説のようにはびこっていて、肉魚卵は遅めに与えるという誤解をしているお母さんがいます。また、味噌汁は市販されているれっきとした離乳食のレシピ本にも登場するのは1歳近くになってからで

す。市町村で開催する栄養士による離乳食講座でも味噌汁は登場しないようです。これはどういう現象なのか、私には理解不能です。いつから味噌汁は赤ちゃんの敵になったのか。日本食は世界遺産なのに。

さらに気になること。

離乳食は市販のベビーフードだと思っている親御さんもいます。たしかに、最近のベビーフードはよくできています。でも、レトルトカレーと自分で作ったカレー、どちらが美味しいでしょう？

レシピ通りならきちんと作ることができるのに、日々の自分たちの食事を工夫して赤ちゃんに与えるという発想がない・応用できない・情報とおりにしないといけな思っている親御さんが増えているように感じています。

先のことを読めない・想像できない

先日こんな出来事がありました。

初めての予防接種に来院した2ヶ月の赤ちゃん、診察を待っている間に寝かせていた処置用ベッドから落ちてしまいました。赤ちゃんは直後フニャ〜んと泣いたものの顔色不良でぐったりしたため救急車で病院に搬送。車内では意識を取り戻し、病院に到着後は元気に泣いて結果はオーライでした。看護師も目を離した一瞬の出来事でしたが、お母さんはその時どうしていたのかというと、赤ちゃんを自分の隣に寝せたままスマホでLINEの返信をしていたそうです。何度か来院したことのある親子で、子育ても一生懸命やっている、普通の真面目なお母さんでした。でもこのようなことが起きてしまいました。

このような事例はご家庭でもよくあります。ソファに寝せていたら、あるいは大人用のベッドに寝せていたら、知らない間に落ちていた、ぐっすり寝ているしまだ寝返りしないから大丈夫だと思って隣の部屋にいまし

た。といった内容です。ほとんどは大事には至りませんが、赤ちゃんあるあるだから、次は気をつけましょうね、と言い、ついでに、一人で歩くようになってからも気をつけることなどもご説明します。

こんなこともありました。

スーパーの駐車場で足がもつれて、抱っこしてた4ヶ月の赤ちゃんを落としてしまい、その子は救急搬送されて急性硬膜外血腫でした。その後発達等の後遺症は見られていないことは幸いでした。赤ちゃんが落ちてしまった原因は、その子のお母さんが高くはないけれど細いヒールのサンダルだったこと、赤ちゃんを抱っこ紐やおんぶ紐などで体にくくりつけてなかったことでした。

24時間常に赤ちゃんに密着して見張っていきましょうという意味ではありませんが、まだ0歳の赤ちゃんから目を離すことや、抱っこ紐などに入れずに腕で抱いただけで外を出歩く行為がどれほど危険を伴うのかが、どうも想像できない親御さんが増えてきているように感じています。

離乳食もそうですが、指示がないと気付かないようなのです。

もしかしたら私もそうだったのかもしれないと思う反面、かつてとは何かが違ってきている、とも感じています。

早期教育の落とし穴

保育園でも言葉が遅いことを心配されているもうすぐ3歳のお子さん。単語ですが言葉らしきものは発するし指差しもします。物事の理解はあるようです。意味不明の何かを言いつつ指差した方向を見るとりんごの絵があり、何と「エポー」と言っていました。お子さんは英単語を喋っていたのです。でも会話のやり取りにはなりません。お母さんに聞くと、保育園から帰宅後ずっとスマホでYouTubeの英語のアニメを観ているとのこと。最初は

親が選んで観せていたけれども今は自分でスマホをいじって選んで視聴しているとのことでした。同様の事例は以前にもあり、その子も3歳過ぎているのに言葉が遅く相談に来院。聞けば0歳から「聴くだけラーニング」の英語教材を常に聴かせ、英会話もネイティブ発音ができるようにしたかったとのこと。英語教材を聴かせるのをやめたところ、そのお子さんは2～3ヶ月ほど普通に会話できるようになりました。

2020年度から小学校でも英語の教科が必修になりました。早期から英語を学ぶことは、これからの世の中を生きていくためにも大切なことです。でもちょっと待って下さい！英語の発音がネイティブなことと、言語によるコミュニケーションの能力が培われることとは違うのです。これも情報過多の負の産物のように感じています。まずは日本語でしよう、と思います。

優しいお父さん・お母さん

診察は医療行為なので、赤ちゃんやお子さんが暴れてしまうときちんとした診断ができません。乳幼児が診察や検査を嫌がるのはわかります。そこをどうなだめすかし、素早くかつきちんと診察するのかは、小児科医の腕の見せ所でもあります。ところが、発達にはなんら問題がないのに、小学生の3～4年生以上になっても咽頭を診る時や検査や予防接種の際に暴れるお子さんがいます。小学生なのでよもや暴れることはないと思いこちらも油断しているので、こうなると大変です。そして、なぜか親御さんはお子さんを叱らない。この子は喉を診られるのが苦手なんです、検査嫌いなんです、で終わりです。時によってはごめんねと親御さんがお子さんに謝っています。

叱らない子育て、子どもの心を尊重する子育て、こんな言葉が大手を振っています。叱

ればいいとは思いませんが、ちゃんと言い聞かせることは大切です。子どもの心を尊重すること、言いなりになること・好きにさせることは違います。嫌なことでも我慢することを覚えて成長しなければ、大人になった時に困るのはお子さんなのに。

DX化と共存するには

文科省は教科書のデジタル化を画策しているようです。この流れには逆らえないのかもしれない。でも本当にそれでいいのでしょうか？

デジタル画面で覚えるよりも、紙の書物を読み、手で文字を書くことのほうが、記憶力も記名力も勝ることは研究で明らかになっています。

スティーブ・ジョブズは自分の子どものiPad使用に制限をかけ、ビル・ゲイツは自分の子どもが14歳になるまでスマホを与えなかったそうです。IT業界の第1人者の2人ともがこのような対応をとっていたことは驚きですが、彼らは子どもや若い世代にとってのITの使いすぎによる危険性を知っていたのだと思います。

とはいってもスマホやパソコンなしの生活はもはや出来るはずありません。医療界でもDX化が進められています。共存の方法なんて実は何がいいのかわかりません。そもそもDX化と共存の必要性なんて感じない・生活そのものがDXという世代が増えてくることになるのでしょうか。

でもあえてもう一度書きます。

本当にそれでいいのでしょうか。

終わりに

生きていく上で、人と人との関わりは避け

ることができません。そして、そこに必要なのは言葉を用いたコミュニケーションです。言葉にも、色々あります。手書きの文字であれば書いた人の心のありようが文字に表れます。字が上手い・下手でなく、書いた人の思いは読む人に伝わります。これはパソコンで打った文字にはできないことです。相手と会話する時には、言葉の強さ・柔らかさ・発する人の表情もセットになってコミュニケーションが成り立ちます。Webでの会話ではこれが不十分のように感じます。

これらのことを十分に踏まえた上で、うまくIT機器を利用していくしかないのだろうなとも思っています。我々昭和世代はまだマシなのです。なぜなら、そもそも生育過程がアナログでしたから。生身の人と関わり、紙の本を読み、手で文字を書く基礎ができている上で、今は仕事でパソコンやスマホを使い、Web会議にも参加しています。

でも、デジタル世界の真っ只中で生まれ、デジタル世代の親に育てられる子どもたちは、これからどのような心身の大人に成長していくのでしょうか。今の若い世代や子どもたちの、打たれ弱さ・人との関わり方の稚拙さを目にするたびに、心配になってしまうのです。スマホやゲームはしまっ、漫画でもいいから紙の本を読もうよ、外で遊ぼうよ、もっと適当に、もっとおおらかでいいよ、と言葉をかけたくくなります。頑張っ、て子育てしている親御さんも応援したいです。

タイトル「子どもたちの未来は…」としたのは、目まぐるしく変化する現代においては、どのような未来になるのか予想がつかない、でも、きっと明るい未来であって欲しいと願っ、てのタイトルでした。